

聖書: 第一列王記22章41～53節

説教: 先祖とともに眠りにつく

はじめに

今日の箇所には主にふたりの王が登場します。一人は父アハブに代わって北イスラエルの王となったアハズヤ。もう一人は南ユダの王であるヨシャファテ。このふたりは44節にあるように友好関係を保っていました。イスラエルが二つの国に分裂した頃はお互いに口も聞かない、人の行き来もしない、そんなふうにして憎み合う間柄でしたから驚くような変化です。でも、けんかしていた二つの国が和解できてよかったというような単純な話ではありません。

今日は、あらかじめ、これからの流れを説明しておきます。まずここに登場するヨシャファテとアハズヤのふたりがどのような王であったのか、そのことをまとめます。続いてヨシャファテがアハズヤとどんな関わりを持ち、それが主の目にどのように映っていたのかを見ます。そしてヨシャファテは死んで墓に葬られるわけですが、そのことが主イエス・キリストとどのように結びつき、また私たちとどのように関わるのか。そのような流れで見てまいります。

1 ふたりの王の評価

1) 南ユダの王ヨシャファテは主の目にかなうことを行った

まず南ユダの王ヨシャファテのことから見ていきます。彼についてはこのように書かれています。43節。「彼はその父アサのすべての道に歩み、そこから外れることなく、主の目にかなうことを行った。しかし、高き所は取り除かなかつた。民はなおも、その高き所でいけにえを献げたり、犠牲を供えたりしていた。」また46節にはこうあります。「彼は、父アサの時代にまだ残っていた神殿男娼をこの国から除き去った。」

神殿男娼については申命記23章17節で「イスラエルの男子は神殿男娼になってはならない」と厳しく禁じられていたのにもかかわらず、異教の神々の影響を受けて、しばらくするうちにこのような制度が入り込んでいました。それをヨシャファテが除き去ったのですから、彼が主の目にかなうことを行ったという評価をされるのは理解ができます。

ところがすべて良いことばかりではない。彼は高き所は取り除かなかつたことが書かれてい

るのです。高き所については少し説明が必要です。昨年モンゴルに行ったときのことで。百キロ先が見通せるほどの草原のところどころ小高い丘があつて、丘の頂上には石や動物の骨を積み上げたものがあつて、その真ん中に色とりどりの布ぎれを結びつけた柱が立っているのを見かけました。「オボー」と呼ばれるチベット仏教の祭壇なのだそうです。これと同じものがイスラエルの小高い丘の上にあつて、「高きところ」と呼んでいました。もちろん偶像を拝むものですから本来はあつてはならない。ところがヨシャファテはこれを残したままだった。それだけではない。実は彼にはもう一つ問題があつたのですが、そのことに触れるためにはまず北イスラエルの王となったアハズヤのことは見ておく必要があります。

2) 北イスラエルの王アハズヤは主の目に悪であることを行った

彼については52、53節でこう書かれています。「彼は主の目に悪であることを行い、彼の父の道と彼の母の道、それに、イスラエルに罪を犯させた、ネバテの子ヤロブアムの道に歩んだ。彼はバアルに仕え、それを拝み、彼の父が行つたのと全く同じように行つて、イスラエルの神、主の怒りを引き起こした。」

アハズヤには全く良いところがなくて、主の怒りを引き起こすことばかりをしていた悪い王であつた。アハズヤの評価については迷うところはありません。では、このようなアハズヤに対してヨシャファテはどのような関係をもつたのか。これが次のポイントとなります。

2 ふたりは経済同盟を結ぶ

1) 船団をつくつたが難破する

48節にあるように、あるときヨシャファテは金を輸入する目的でタルシシュの船団をつくり、オフイルという地域に向かわせようとしたことから問題が起きます。オフイルは、地図で言えばアラビア半島に沿ってずっと南の方に向かった先、いまのイエメンのあたりのところにある。当時の船では相当危険が伴うほどの離れていた。案の定、つくつた船が嵐に遭つて難破してしまつたというのです。それはよいとして、どうして船の事故の話がここに突然のようにで来るのでしょうか。にわかにつながりません。

2) 主は打ち壊す (第二歴代誌20章37節)

そこで、並行箇所にあたる第二歴代誌20章36、37節を開いてみます。「ヨシャファテはタルシシュへ行く船団をつくるために、アハズヤと同盟を結んだ。そして、彼らはエツヨン・ゲベルで船団をつくった。マレシヤ出身のドダワフの子エリエゼルがヨシャファテに向かって次のように預言した。「あなたがアハズヤと同盟を結んだので、主はあなたが造ったものを打ち壊されます。」すると、船は難破し、タルシシュへ行くことができなくなった。」

これを読むと、ヨシャファテがアハズヤと手を組もうとしたことが問題であったことが明らかになります。預言者エリエゼルが遣わされ、船が壊されると言うのですが、ヨシャファテはそれでも予定どおりに船を出発させ、とうとう船が難破してしまっただけです。

ここで一つの疑問にぶつかります。第一列王記に戻って22章49節とどう調和させるのか、です。アハズヤが手を組もうと申し込んできたのをヨシャファテは断っています。これは、先ほどの第二歴代誌にヨシャファテはアハズヤと手を組んだと書かれていることと矛盾するように見えるのです。調べてみるとこのようなことでした。ヨシャファテとアハズヤの交渉が一回ではなく二回あったと考えてください。一回目の交渉の時にヨシャファテはアハズヤと手を組んで船団をつくったのですが、その船がエリエゼルの預言のとおりになんとか難破してしまっただけです。そんな事故は最初から織り込み済みということなのでしょう、アハズヤは諦めない。もう一度船を造り直してオフィルに向かわせましようとして二回目の交渉を申し出てきた。しかしヨシャファテは、そのときすでに預言者エリエゼルのことばを聞き、アハズヤと手を組むのは主のみこころではないと学んでいました。それで二度目の申し出には同意しなかった。そういういきさつです。

ヨシャファテは主の目にかなうことを行っただけで書かれてはいますが、細かく見ると彼はいろいろ失敗をしているのです。高きところは除かなかつたし、主の目に悪であることを行っていたイスラエルの王アハズヤと手を組もうとして、主から懲らしめを受けていた。そのような王さまでした。

3 神

1) 先祖とともに眠りにつく

そのヨシャファテも地上の生涯を終えて先祖とともに眠りにつきます。50節。「ヨシャファテは

先祖とともに眠りにつき、先祖とともに父ダビデの町に葬られた。その子ヨラムが代わって王となった。」

列王記を見てきてすでにお気づきの方もおられるかも知れませんが、ユダの王さまが亡くなって墓に葬られるとき、聖書ではいつも決まり文句のように同じフレーズが繰り返されています。50節もそうです。王さまの年代記を記すときの決まり文句ということなのか。

いや、聖書はすべてに意味があります。ではどんな意味があるのか。そもそもいつからこのことばが言われるようになったのか。さかのぼると第二サムエル記7章12節の、あるとき主がダビデに語ったことばにたどり着きます。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」

いわゆるダビデ契約と呼ばれる大切な約束です。これを聞いたダビデは感動に打ち震えながら主をほめたたえたわけですが、ではそのダビデは完全に主の目にかなうことを行う王であったのか。違います。これほど大きな約束をいただいたすぐ後に、彼は例のバテ・シェバ事件を起こしてしまっただけです。

ヨシャファテだって似たようなものです。神殿男娼は除き去ったかも知れませんが、高きところに据えられていた偶像を拜む祭壇はそのまま残したままだったし、主の目に悪を行っていたアハズヤと平気で手を組もうとした。彼も完全な王ではなかったのです。そんな王さまが先祖とともに眠りにつき、ダビデの町に葬られる。そして続いてその子どもが次の王となる。これは何を意味するのでしょうか。

2) 「眠る」

眠るということばに注目したいと思います。イエスはあるとき、ヤイロという人の娘が死にかけているので是非来てくださいと呼ばれたことがありました。ところがヤイロの家に向かう途中手間取ってしまい、お嬢様はなくなりましたという知らせを聞きます。家に行ってみると人々は泣いている。それをご覧になったイエスはこのように言われました。「その子は死んだものではありません。眠っているのです。」(マルコ5章39節) この後、イエスが子どもの手を取って「少女よ、あなたに言う。起きなさい」と言われると少女はすぐに起き上がり、歩き始めたのでした。

ヨシャファテも地上のからだは滅びて死んでいくわけですが、聖書では死んだとは言わずに「眠る」とか「横になる」と書く。どうしてか。イエスが死んでいた少女をよみがえらせてくださったように、復活することが約束されているからこのように表現するのです。

3) 救いの約束は決して取り去られない

するとここはどういうことになるのか。ダビデに続く王たちがどんなにひどい罪を犯そうとも、どんなに不完全であろうとも、ダビデに語られた契約はそのまま引き継がれ、眠った者はよみがえっていく。そのことを成し遂げてくださったのが、ダビデの子孫として来られたイエス・キリストであった。この方がとこしえに神の王国を確立してくださった。そのようにつながることになる。

これと同じことが私たちにもあてはまります。私たちは主を信じ、主から救いの約束をいただいています。では皆さん主の前に聖く正しい生活ができていますか。したいとは思いますが、でもできないという連続の中で悲しんでいます。こんな私を神さまは悲しんでおられる。そのように自分を必要以上に責める方がいます。しかし、覚えていただきたいのは、一度約束された救いの約束は絶対に取り去られることはない、ということです。私たちは、復活の主にならざるを得ない、ということです。

二週間前、礼拝が終わってから藤野にある教会の墓地に出かけ、楽しいひとときを過ごすことができました。墓を見ながら心が躍る。世間の人たちが見たら不思議に思うでしょう。でも私たちは喜ぶ。なぜなら、私たちは死ぬのではない。眠るだけ。主が名前を呼んだくださる声を聴くとき、私たちはよみがえり、主に出会うことができます。ダビデを通して語られた約束をそのまま私たちもいただいている、いたっている恵みに感謝します。